

中学生のいじめ被害分類と対人関係の関連

○舒悦 (北海道大学)
太田正義 (常葉大学)

加藤弘通 (北海道大学)

キーワード：いじめ被害, 対人関係, 潜在クラス理論

問題

今までのいじめ被害についての研究は、それぞれの被害の様態別に検討してきた。しかし、Waasdorp (2015) が指摘しているように複数様態のいじめ被害は同時に発生することが多い。したがって、被害を個別に研究するのではなく、いじめ被害のあり方を分類し検討する必要がある。本研究では、中学生を対象に潜在クラス理論を用い、被害をいくつかのクラスを分類し、複数のタイプに被害を分類する。そして、そのクラスによって、対人関係にどのような違いがあるかを明らかにする。

方法

調査協力者 中学生 18877 人 (男子 9707 人, 女子 9075 人, 未記入 95 人), 調査時期は 2017 年 7 月。

質問紙の内容

「いじめ被害経験」, 「教師との接触」, 「教師との関係」, 「親との関係」を 5 件法で回答してもらった。

結果

1. クラス数の選定と解釈

週に 1 回以上被害したと回答した生徒いじめ被害者とし、ダミーコーディングを施して (0=非被害者, 1=被害者), 潜在クラス理論で分類した。BLRT 法の結果により, 6 クラスを採択した。

Table 1 クラスごとの適合度指標

	Log L	AIC	BIC	Entropy	<i>p</i>
1	-19029.06	38074.12	38136.80	-	-
2	-15299.23	30632.46	30765.65	0.929	0
3	-15029.07	30110.13	30313.84	0.945	0
4	-14861.95	29793.91	30068.13	0.935	0
5	-14826.10	29740.20	30084.93	0.926	0
6	-14809.76	29725.52	30140.77	0.929	0
7	-14799.78	29723.56	30209.32	0.921	0.118

クラスに命名は各観測変数の該当ありの割合に着目して、以下のようにした。

Table 2 クラスの構成比と観測変数の該当ありの割合

観測変数	無し	関係	物質	直接	従来	全体
無視	0.4%	44.0%	10.8%	0.5%	56.5%	97.2%
物取り	0.1%	4.2%	53.9%	11.7%	47.0%	100%
陰口	1.5%	88.3%	1.7%	17.5%	74.8%	100%
殴る	0.2%	1.6%	9.4%	42.4%	61.8%	100%
直接悪口	1.1%	43.9%	15.8%	46.8%	91.2%	100%
サイバー	0.0%	7.0%	0.0%	5.4%	17.6%	90.5%
遊ぶふり	1.2%	8.5%	22.9%	57.4%	67.7%	97.1%
性的	0.1%	0.3%	3.8%	6.8%	13.4%	87.0%

2. クラスと対人関係の関連

いじめ被害クラスごとに教師との関係, 接触頻度, 親との関係の特徴を把握するため, 分散分析を行った。その結果, 全てにおいてグループごとの主効果は有意だった ($F_{教師頻度}(1, 5) = 19, p < .001, \eta^2 = .005$; $F_{教師関係}(1, 5) = 39, p < .001, \eta^2 = .010$; $F_{親関係}(1, 5) = 45, p < .001, \eta^2 = .012$)。多重比較の結果, 「いじめ無し」グループと他のグループで有意差が見られた。特に, 全体的にいじめ被害を受けた生徒と教師の接触頻度が有意に低かった。

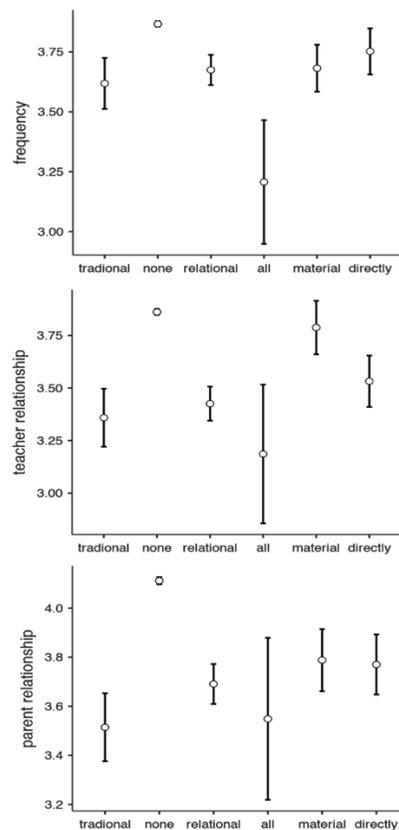


Figure 1 クラスと対人関係の関連

考察

以上より, 中学生のいじめ被害のあり方は, いくつかのタイプに分類可能であることが示唆された。また, もっとも深刻な被害のクラスであると思われる全体的な被害群は, 他のクラスに比べ教師との接触頻度が低かった。したがって, 深刻化を防ぐには, 被害生徒と教師の接触頻度をより高めることが必要であると考えられる。